

令和7年度リンダウ・ノーベル賞受賞者会議 参加報告書 兼 アンケート

参加会議： 第8回会議(経済学関連分野)

所属機関・部局・職名： 東京大学・大学院経済学研究科・博士課程

氏名： 土屋亮太

1. ノーベル賞受賞者の講演を聴いて、どのような点が印象的だったか、どのような影響を受けたか、また自身の今後の研究活動にどのように生かしていきたいか。〔全体的な印象と併せて、特に印象に残ったノーベル賞受賞者の具体的な氏名(3名程度)を挙げ、記載してください。〕

【全体的な印象】

もともとリンダウ会議への参加を決意した理由として、現在の経済学の潮流と学問的関心がどこに向かっているのか、その全体像を把握したいという思いがあった。今回の参加を通して、個人的にその要点をまとめるならば、AIと気候変動、そしてそれらに伴う不確実性の増大というテーマが焦点となっているのではないかと感じた。マイクロ・マクロ・計量のすべての分野において、みな各々の研究領域から同じ問題を独自の視点で考察しており、非常に勉強になった。

【Guido W. Imbens 教授】

Imbens 教授の講演では、まさに AI の問題について計量経済学の立場から議論されていた。特に興味深かったのは、AI 技術を駆使することで、これまで困難であった因果推論の分析、とりわけ適切な操作変数の発見に役立つというものであった。しかし、それは同時に、これまで応用計量経済学で価値あるものとされてきた独自性のある操作変数の提起という価値観を根本から覆す可能性もあると述べ、AI との共存・差別化という点について深く考えさせられた。

【Sir Oliver D. Hart 教授】

Hart 教授のレクチャーは気候変動に関連したものであり、その主眼は「環境に優しい企業活動をどのように促進させるか」という企業統治の問題だった。その解決策の一つとして、Citizen Assemblies という古代ギリシャ時代の概念に着目し、それを現代に応用した事例をいくつか紹介されていた。企業はしばしば政府に対してロビーイング活動を行うため、政府による外側からの規制ではなく、株主など企業内部の構成員による内側からの規律づけが有効だとする主張は、非常に興味深かった。

【Eric S. Maskin 教授】

講演内容は、投票制度に関するマイクロ経済学理論の研究紹介であったが、非常に分かりやすい具体例を用いながら説明される姿が印象的だった。マイクロ経済学の優れた理論家というのは、一つの具体的な事象の背後にある本質を鋭く捉え、それがいかに一般的な法則であるのかということ直観的な言葉で伝えることができる人なのだと改めて痛感した。私自身も今後、理論家としての目をさらに養い、彼らに少しでも近づけるように努力し続けたいと思った。

2. ノーベル賞受賞者とのディスカッション、インフォーマルな交流(食事、休憩時間やエクスカーション等での交流)の中で、どのような点が印象的だったか、どのような影響を受けたか、また自身の今後の研究活動にどのように活かしていきたいか。[全体的な印象と併せて、特に印象に残ったノーベル賞受賞者の具体的な氏名(3名程度)を挙げ、記載してください。]

【全体的な印象】

ノーベル賞受賞者との交流の中で一番印象的だったことは、彼らが我々のような若手経済学者の一人一人を大切に育てようとする精神に溢れていたことである。たとえば、若手経済学者によるプレゼンテーションでは、どの受賞者もみな必ず質問やコメントを残されていた。発表時間は非常に短く、内容を正確に理解するだけでも難しいと思われる中、あらゆる研究に対して示唆的なコメントができる能力に、改めてノーベル賞受賞者の凄さを感じた。他方で、プログラムの合間の休憩時間には、他の参加者に混じり、多くの研究者と親しく会話をされており、論文や教科書の上でしか見たことがなく、自分とは遠い世界の人々だと思っていたノーベル賞受賞者の方々を間近に感じることもでき、彼らの教育的でサポーターティブな姿勢に驚かされた。

【Eric S. Maskin 教授】

私は Maskin 教授の Open Exchange に参加したが、Maskin 教授は、すべての質問に対して丁寧に最後まで聞き、そして自分の意見をじっくり考えた上で答えている姿が印象的だった。ディスカッションでは、レクチャーに関する質問以外にも、近年の理論と実証の関係をどのように見ているかについて問われ、Maskin 教授は、昔と比べて両者の関係はよくなってきていると回答していた。その理由としては、よいデータが手に入るようになったことで、理論仮説の検証が以前よりも高い精度で行えるようになってきたからだと述べていた。私自身も、理論研究を行う者として、常に後続する実証研究の存在を念頭に置きながらモデル構築や理論分析を進めていくべきだと思い、とても勉強になった。

【Robert J. Aumann 教授】

Aumann 教授とは、Laureate Lunch と Open Exchange でご一緒させていただいた。ランチでの会話の中で特に印象に残っている話は、「今までに書いた論文の中で、最も時間と労力がかかったものはどれか」という質問に対して、ある論文を挙げ、その論文は完成までに実に 10 年の歳月がかかったと答えていた。さらに、その中身も驚くもので、ほとんどすべての作業は 3 年で終わっていたが、一つの補題の証明が誤っていることに気づき、その証明のために追加で 7 年の時間がかかったというものであった。たった一つの細かいところまで手を抜かず全力で研究に取り組む姿に深い感銘を受けた。また、論文にかける年数とその後の引用数が、必ずしも比例しないことにも言及されており、非常に興味深く拝聴していた。

また、Aumann 教授とのディスカッションでは、主流派の経済学が前提とする合理性と、人々の感情や道徳(モラル)との関係について多くの議論が交わされた。この話を聞き、現代経済学がその原点である Adam Smith の時代に戻りつつあるのではないかという印象を強く受け、私もいつか、このような壮大なテーマに挑戦してみたいと思った。

3. 諸外国の参加者とのディスカッション、インフォーマルな交流の中で、どのような点が印象的だったか、どのような影響を受けたか、また自身の今後の研究活動にどのように生かしていきたいか。

5 日間にわたるプログラムでは諸外国の参加者と交流する機会が豊富にあり、みなとても研究熱心で互いを尊重する姿が印象的だった。どの参加者もお互いの研究内容に関心を持ち、自分の専門分野とは異なる話題であっても積極的に議論していた。今回の参加を通して、改めて、自分の専門分野を突きつめるだけでなく、幅広い視野を持ちながら学び続けることの大切さを認識した。

関連して、今まさに経済学が様々な方向へと発展していることも実感した。特に、若手による研究発表を聞いていて、同じセッションに割り当てられた人たちの中でもテーマや研究手法は実に多様であり、経済学が幅広い社会課題を分析できるものへと進化していることを目の当たりにした。しかし、それと同時に、経済学全体がますます細分化されてきているという感覚もあった。いわゆる、グランド・セオリーのような統一的枠組みを失い、研究者同士の相互理解がますます困難になっていくのではないかという危機感もあった。

また、キャリアの面では、自分の出身国とは異なる国で研究する人が多いことも印象的だった。たとえば、ドイツやスウェーデンなどのヨーロッパ諸国で研究活動をする中国人の方や、イタリア出身で現在はシンガポールの大学に勤務する研究者の方など、みなそれぞれ自分のキャリアパスを描き、果敢にチャレンジしている姿を見て自分も勇気をもらった。

4. 日本からの参加者とのディスカッション、インフォーマルな交流の中で、どのような点が印象的だったか、どのような影響を受けたか、また自身の今後の研究活動にどのように生かしていきたいか。

はじめに、今回日本から共に参加された吉川英輝さんと立石泰佳さんには、改めて感謝申し上げる。お二人とも、今回が初対面であったにも関わらず、リンダウ滞在中は多方面でお世話になった。ホテルでの朝食や行き帰りのバスでは、前日に参加したプログラムやその日にあった出来事などをお互いに共有することで、自分が参加できなかったプログラムの話を聞けたり、自分の体験を整理し直すことができたりして、大変有益であった。

また、お二人のバックグラウンドや研究内容を聞き、大きな学問的刺激も受けた。私たち3人は専門分野も研究アプローチも異なっていたため、普段の研究の進め方や、研究上の困難も皆それぞれ違っていた。特に、歴史研究では、結果のメカニズムの面白さよりも、ある要因がその結果にどれだけ決定的に影響したと言えるかが研究の評価基準になっていることを学んだ。また、発展途上国でのフィールド調査についても詳しくお聞きすることができ、現地の担当機関との調整など実証研究ならではの困難を知ることもできた。そのほか、海外 Ph.D. の話を聞いたり、今後のキャリアプランについて語り合ったりすることができ、良い交流ができた。

今後も、このリンダウ会議で出会えた縁を大切に、狭い意味での研究にとらわれることなく、様々な形で互いに切磋琢磨し合える関係を続けていきたいと思った。

5. 特に良かったと思うリンダウ会議のプログラム(イベント)を3つ挙げ、その理由も記載してください。

【Next Gen Science Sessions】

幸運にも、Economic Theory のセッションで研究発表の機会を頂くことができた。報告 6 分、質疑応答 3 分という限られた時間ではあったが、複数の参加者から有益な質問とコメントを頂き、濃密な時間となった。中でも、Myerson 教授からは、用語の使い方がミスリーディングであるという尤もな指摘を受けた。また、Hart 教授と Maskin 教授からは、ともにモデル設定と現実との対応について非常に鋭くかつ重要な視点を提供していただいた。そのほか、セッション終了後には、複数の若手研究者に興味を持って話しかけていただくことができた。

【Laureate Lunches】

ノーベル賞受賞者と昼食をともにしながらフランクに会話できる貴重な機会だった。自己紹介を含め、事前に用意していた質問を聞くことができた。また、同じような興味を持つ同年代の若手研究者とも交流することができ、とても有意義であった。

【Open Exchanges】

特に決まった議題を設けないディスカッションの場であり、ノーベル賞受賞者に自由に質問をすることができた。私の場合、参加者は 20 名程度だったので、レクチャーに関する追加の質問や、より幅広く研究への向き合い方などについて、直接伺うことができる良い機会だった。

6. その他に、リンダウ会議への参加を通して得られた研究活動におけるメリット[具体的な研究交流の展望がもてた場合にはその予定等を記載してください。]

今回、私は Participant Directory という名簿リストを参考にして、自分の研究関心と近そうな若手研究者を事前に調べておき、彼らと積極的にコミュニケーションを取るよう心掛けた。現地で交流を深めるうちに、何人かの参加者と研究ネットワークを築くことができた。まだ具体的な共同研究の話まではできていないが、新しい研究者仲間ができたことは大変有り難い。

1 人目は、ドイツの Max Planck Institute に所属する博士課程学生である。偶然にも、私は来年度、彼女の指導教官のところに Visiting Researcher として研究滞在することを考えていたため、今回の出会いは大きな収穫だった。専門分野が近いこともあり、今後の共同研究の可能性を模索していきたい。

2 人目は、インドの Gulati Institute of Finance and Taxation で Assistant Professor を務める方である。私の専門が公共経済学ということで、リンダウ会議終了後にメールを頂き、彼女の所属研究機関が開催しているセミナーに招待していただいた。具体的な日程は今後調整していく予定である。

3 人目は、オーストリアの University of Graz に在籍する博士課程学生である。リンダウ会議では、私の研究発表に多くのコメントをしていただき、大変有益な議論ができた。これを機に新たな方向性の研究を進めていきたい。

7. リンダウ会議への参加を通して得られた上記の成果を今後どのように日本国内に還元できると思うか。

今回の経験を日本に還元する方法は、大きく3つあると考える。まず、最も重要なことは、私自身が、ノーベル賞受賞者や世界各国から参加された優秀な若手経済学者の人々に少しでも近づけるよう、地道に研究努力を積み重ねていくことである。同時に、Lindau Alumni Networkなどを活用しながら、国際的な研究ネットワークを広げ、海外への研究発信を続けていく。

次に、ノーベル賞受賞者の講演で学んだプレゼンスキルなどを、日本の大学教育に役立ていくことが考えられる。講演スタイルは受賞者ごとに大きく異なり、スライドに沿った明快な講義をする人もいれば、スライドを全く用いずに聴衆に訴えかけるようなレクチャーをする人もいた。これら多種多様なレクチャー方法を参考に、自分なりの授業方法のあり方を今後も試行錯誤しながら見つけていき、日本の教育水準の向上に寄与していきたい。

最後に、日本国内において、リンダウ会議の知名度を高めていくことで貢献することができる。実際、私の周りでも、本派遣事業の存在をそもそも知らず応募できなかったという人もいたため、本来興味のある学生は相当多くいるのではないかと思う。そのため、このリンダウ会議の魅力を幅広く伝えていき、次世代の研究者の挑戦を後押しすることができれば幸いである。

8. 今後、リンダウ会議に参加を希望する者へのアドバイスやメッセージ

リンダウという素敵な街で過ごした5日間は、私の研究人生においてかけがえのない経験となりました。多数のノーベル賞受賞者をはじめ、世界中の素晴らしい経済学者と出会うことのできる、またとない機会だと思います。ぜひこの貴重な機会を十分に活用していただき、皆さんの今後の研究発展に繋がることを願っています。



写真は、リンダウ会議場前(左)とリンダウ港(右)で撮影したものです。

(以上の記載内容は、氏名と併せて日本学術振興会ウェブサイトに掲載されます。)